

海外研修便り③



今回のアメリカ研修の目的は①NIHの看護師の役割を学習し当院に還元すること②自分の論文を仕上げることでした。5ヶ月間が経過した今、この2点と③アメリカ生活から得られたことを併せて以下に述べたいと思います。

①アルコール依存症治療病棟での NIH の看護師の役割は、治療的な関わりが強いと感じました。例えば、ジェネリックチャート（アルコール依存症の回復過程を記したもの）を使用した個人面談を密に行っておりますし、認知行動療法や酒歴発表など、断酒のための講義等は看護師が主体で行っています。もちろん、職業の棲み分けの徹底による時間的余裕があるからこそ実現できている関わりとも感じましたが、看護師が治療において主体的に関われる体制は、スタッフのモチベーションにも、患者様の健康にも繋がるものと、NIHにて実感しました。

②自分の論文に関しては全体の構成も決まり、70%ほどの行程が終了しました。残り1ヶ月で書き上げたいと考えております。この調査結果が、今後のアルコール依存症者の回復の一助となればと、願っております。



入院プログラムのレクリエーションとして訪れたアメリカ造幣局

③アメリカ生活で最も印象的であった慣習は「アメリカ人は群れない」点です。それが「他人は他人、自分は自分」としっかり自立している印象を私は受けました。国民性なのかもしれませんが、アメリカ人の「自分の目的にまっすぐ」な姿勢はとても心地よく、潔いと感じました。私も今後の人生において「自分の目的にまっすぐであり続けたい」そのような境地に至ることのできた、アメリカ研修でした。



外来の陽気な看護師さん(右)と筆者(左)

最後に、このアメリカ研修を可能にして頂いた樋口院長をはじめ、多忙のなかサポートして頂いた間総看護師長、秋山庶務班長、前任者の阿部さん、中尾さん、ならびに、人員の少ない中、壮行会まで開いて私を送り出してくださった東1病棟スタッフ一同へ、心より感謝、申し上げます。

2013年2月25日

沼野